だぁくねす★でいず

野良鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
だぁくねす★でいず

【Ｎコード】
Ｎ８６０８Ｒ

【作者名】
野良鴉

【あらすじ】
黒歴史（ダークネスデイズ）、それは消し去りたい過去のこと。でもそれはあまりにも消すには重たかった。たとえ「私」か自身を含む彼らが嫌いだとしても、彼らといる間はそれを忘れてしまうから。
これは溝を感じる「私」ことレイヴンと仲間の平和（？）なやりとり。

3月19日　卒業式

折り紙の輪がぶら下がった廊下。
廊下の掲示板には赤い文字。
教室の四隅には柔らかい、和紙のような紙で作られたピンクや青の花々。
黒板にはピンクのチョークで同じ文字と、桜と、担任からのメッセージ。

“中等部過程修了おめでとう！”

私は学校指定の緑のカバンに顔をうずめた。周りでは友達がワイワイガヤガヤ騒いでいる。
「今日で中等部終わりかー。」
「実感ないねー。」
「どこの学科いくのー？」
「あ、私は魔術部水系特化科だよー？」
「私は魔術部火系特化科だから別れちゃうねー。」
「どーせ帰りは同じでしょ、アハッ。」
初等部で才能を剣や魔法などの才能を見いだされた者が中等部へ進む。そして基本的なことを学び、高等部でそれを深めるのだ。
その際、自分が特に深めたいと思った学科を決めるのだが――――――――――――。
それが私のため息のもとだった。

だすっ

「うっ」
半ば濁点のついた「う」。それはいきなり右の脇腹に拳がめり込

んだからだった。悶絶していると、上から陽気な陽気な声が。
「どうしたのー？大丈夫ー？」
「何すんだよ……。」
気だるそうな言葉と共に顔を上げて声の主を見る。
ショートカットのメガネ。口元には「してやったり」とでも言いたげな笑み。生徒会のモデルにも採用される少女だ。
「やっぱお前か……。希夕（きせき）……。」
「え、ごめん。テンションひっくっ。いつもなら噛みついてくるじゃないか！」
「噛みつくかアホ。すね蹴りだ。」
私はまたむすっとしながら鞄に顔をうずめる。
希夕とは、中等部のどの生徒よりも長い付き合いだ。
まず家が近所。
よって登下校が同じドラゴン。
さらに休み時間には毎回やってくる。中等部の3年間で一緒になれたのは2年生の時だけだが、一緒にいると楽しい人物の1人である。
「テンション低いー。どうしたー。」
私は何も答えない。悪いとは思ったが、気分が口をきかせてくれなかった。
すると希夕が言う。
「今がチャンスだっ！」
……何の？
考える間はなかった。頭をポカポカと殴られる。痛くはないが、頭の中が揺れている感じがして気分が悪い。
「やめろ、希夕。」
「ハッハッハー、やめないぞ。」
がっ

腕を掴んでやると、わずかな悲鳴が聞こえた。
「きゃー怖いー。放せー。」
そのあとで、何ともわざとらしい棒読みの悲鳴が聞こえる。
ため息をつきつつ放してやると、彼女は戸惑ったような声を上げた。
「そ、そんな怒んなよぉ。」
「別に。」
「狸堵(りと)狸堵ぉ、この人怒ったぁー。」
希夕が「ヘルプミー」とでも言いたげな声でその名前を呼ぶ。
「どうしたのっ！？何があったのっ！？」
無駄に熱を込めた物言い。狸堵がふざけるときの特徴だ。
黒と言うよりは焦げ茶に近い長髪を１つにまとめた、メガネ。白い肌によく似合っている。
「……別に。」
「分かった！お腹空いたのね！」
「ねぇさっきメシ食ったばっかなんだけど。そこまで燃費悪くないんだけど。」
『えーうそー。』
二人の声が重なる。さらに希夕が続けた。
「リッター１？でしょ？」
「全部で何リッター入れる気だアホ。」
「何リッターって！？　２０くらい入って当たり前でしょっ！？」
「有機物として扱え。」
うつむいたままツッコむのは疲れる。私は顔を上げた。
「ねぇー大丈夫？」
希夕が聞いてくる。私はため息をつきつつ
「今更だな。」
と答えた。
机の横のフックにカバンをかけ、左手で頬杖をつく。そして二人を見た。

「んで？どうしたの？」
「暇だったんだ。」
「うんまあそういうことだとは思ってたけど暇だからって入ってきて人殴るな馬鹿。」
希夕の即答に即答で返しながら、よく噛まなかったなー我ながら感心した。それと同時に苦笑した。
希夕の性格は、3年間変わっていないらしい。
諸行無常が叫ばれる世の中、変わってしまった私にはすごく羨ましかった。彼女のことだ、どうせ絵描き専用のファイルを忘れたのだろう。彼女の暇つぶしと言えば、絵だから。
それもしゃれにならないくらいうまい。本人曰く、「得点は美術で稼ぐしかない。」
……まぁ私も暇だからため息をついていたのだけど。……はぁ。
「おーい舎弟のシスター、姐(あね)さんがため息ばかりついてるわよ！？」
「何ですと？」
狸堵の呼びかけに、教室の隅にいた少女が振り返る。ボブのメガネ。前髪は目よりも少し長く、ピンで左右に分けている。緩やかな弧を描いたその口からは、いまにもある言葉が出そうだ。
「姐さん、どうしたしたっ？」
でやがった。
別に、シスターは私の舎弟ではない。友達だ。しかしいつ頃からか彼女は、気が向いたときに私のことを「姐さん」と呼んでいた。
……だって、「姐さん」にはタメ口をきかないはずだから。
「姐さん、そんなため息ばかりだと、幸せが逃げていきやすぜ？」
「今の私には不安しかねぇんだよ。」
「大丈夫です、あっしがなんとかしやす。」
「無理。」
これは自分の問題。自分で選んだことなのだから、人にどうこう言われ、どうこうしてもらえる筋合いなどない。

……はぁ。
「大丈夫。卒業式の代表で読むあれと、高等部に多少の不安があるだけだから」
「たのもぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！」　ガシャァァァンッ！
私の「ら」にかぶせ気味に、その声がそのフロア全体に響き渡った。ドアがものすごい勢いで開いた衝撃さえも響いた。
『なんかきた。』
その場にいる全員の言葉が重なる。
ドアを開けたのは、毛先にクセのあるジョートカットの少女。狐目まではいかないが細い目が、笑っていた。
「ハッハッハー、降臨！」
「刹那（せつな）、邪魔。」　がっ
ふざけた登場をする刹那を蹴り飛ばす形で、スラッと背の高い少女が入って来る。
「いたいっ、ランス！」
「ん、どうした？」
白々しい返事をしたランスもまたショートカット。手には世界中で大ヒットした分厚い本が握られている。
「姐さん、“磁石”発動しやしたね。」
『ハハハハハッ』
私以外が笑った。
どうも私が座っていると、このメンバーが集まってくる。それをこのメンバーは“磁石”と呼ぶのだ。
「そういえば、みんなどこの科いくの？」
希夕が私の心をえぐる発言をする。私はまた突っ伏した。
「私は魔術部回復特化科。」
と、狸堵。
「あっしは魔術部風系特化科ですぜ。」
と、シスター。
「えーっと私は魔術部氷系特化科だったと思う。」

「お前自分のことだろ。私は武装部特殊科。弓だよー。」
自分の科も忘れかけているのは刹那。どこから取り出したのか、弓をブンブン振るのは希夕だ。
「あたしは魔術部召喚特化科。」
と、ランス。
私は1人、ため息をついた。
「レイヴンは？」
レイヴンとは私の名だ。
「……部……科。」
私はボソボソと答える。
「え、何？」
「総合部総合科。」
『え、何それ？』
私以外の声が重なる。私はため息をついた。
「まぁすごーく簡単に言うと」
「……全部。」

4月1日　春休みなのに登校。

中等部と高等部の間。
バスケットゴールがある、明るい場所。ベンチとテーブルもあり、晴れた日にはそこで弁当を食べることができる。たまにドラゴンの往来もあるが、春休みの今は、静かな場所になっていた。
そしてまだ中等部の制服でノコノコ登校してきた私たちは、今、そこで弁当を広げている。
「……レイヴン大丈夫？　目の下、くま。」
今日は希夕と刹那と私の3人だ。ほかは旅行に行っているらしい。
希夕に言われ、私は目をこすった。
「大丈夫、眠れてないだけ。」
『大問題だろ。』
2人に同時に言われて、私はため息をついた。
「そんなに心配？　高等部。」
刹那がフォークで米粒をつつく。「あーゆーじゃぱにーず？」と聞きたくなるが、もう3年間見てきた光景につき、もう聞く気も失せた。
「ほら、レイヴンは変な科だから。」
「あーね。がんばれー。」
「お前ら人ごとの上に“変な科”って何だよ。」
雷でも落としてやろうか。
高ぶった感情を鎮め、私はため息をつきつつ言った。
「違うんだ。それとは別。」
「え、何、恋ぐほあっ」
そう言った刹那を殴り飛ばし、私は弁当の餃子を口に運んだ。いつも通り、冷えている。「んで？　どうしたの？」
何事もなかったかのように刹那が復活。そして私たちは何事もなかったかのように食事を続ける。

「……実は」
『実は？』
言ったところで信じてもらえるはずがない。しかし知りたがっているのだし、言うしかない。
私はそう決心し、口に出す。
「命を、狙われてるかもしれない。」
2人は顔を見合わせた。そして何かアイコンタクトをとり、うなずく。そして。
「自意識過剰！」
「技名かよっ！？」
刹那の氷魔法。刹那がつきだした右手の前に青白い魔方陣が出現、そこから氷の刃がいくつも飛び出してくる。私は弁当をひっつかんで横に跳ぶ。
「エプリルフゥゥゥル！」
希夕の声に潜む殺気を感じ、もう一度横に跳ぶと、間一髪、3本ほどの矢がかすめた。「何すんだよ、そしてもう少しネーミングセンス鍛えろ！」
と叫びながら1口。
「いや、技名じゃないし。第一エプリルフールだからって嘘着いたのそっちでしょー。」　希夕が手を振る。弓がしなってブンブンと音を立てた。
「疲れてるんだよ。今夜は早く寝るんだ。」
刹那もうんうんっと首を縦に振る。
私はため息をつきつつ席に戻った。すると希夕が「今更だけど」と口を開く。
「どうしてそう思うの？」

「あ、それ。気になる。」
確かに今更だが、もっともな質問だ。私はご飯を食べながら言う。
「炎の塊がよくとんでくるんだ。ファイアボールが。」
「ファイアボールってあの中級魔法？」
希夕が驚いたような声を上げる。
炎系中級魔法、ファイアボール。魔法のランクが低いうちはそれほど威力もない。しかし高ランクになってくると、その威力はだんだん大きくなってくるのだ。最終的に、威力は絶大、舎弟範囲も広くなるなる。その分、魔法を使うのに必要なマナの消費は激しいくなるが……。
『嘘でしょー。』
２人からの視線が痛い。
「あんな魔法から逃げられるはずないじゃん。エプリルフールにつく嘘を考えて眠れなかったんじゃないの？」
と、刹那。
「うん、死んだら認めてあげる。」
希夕が冗談交じりなのはきょうがエプリルフールだからだろう。しかし少しイラッときた。
「じゃあ」
私は口の端を歪める。

「死ねばいい、俺とな。」

あ、一人称変わった。
「えーレイヴンと心中とかい」
希夕が言葉を飲み込む。それはきっと視界の端に炎の塊が映ったからだろう。２人はその方向を見る。
２人の悲鳴と、私の笑い声が響いた。
死んだら認めるんだろう。だったら死ねよ。
私は横を見た。炎の塊がゆっくりととんでくる。その熱を肌で感

じながら、私はため息をついた。
いつもよりも小さい。このくらいだったら保健室行きで何とかなるだろう。しかし初回の2人には刺激が強すぎたか。
――――――――――――と。

しゃんっ

誰か、同じ中等部の制服を着た子が炎と私たちの間に飛び込んできた。2本の剣を抜き、炎の塊を受け止めいている。
私たちは彼を知っていた。
学年で最も高い身長。あまり感情を外に出さないメガネ。本好き、描く絵が妙にうまい武装部特殊系に進学する少年。
――――――――――――ヴェルト。

「……はぁっ」
彼は短い息を吐きながら、右へ炎の塊を飛ばした。そして片膝を着く。
ばーんと、横でそれが爆発した。顔を熱風からかばうために腕で顔を覆う。もう大丈夫かと腕を外すと、ヴェルトが自分たちを見ていた。
「……怪我は？」
「ないよ。ありがとう。助かった。」
笑いかけると、ヴェルトは小さく頷いた。
「ヴェルがここにいるってことは。あいつもいるってことだよね。さては犯人は……。」
再びヴェルトが頷く。私はため息をつき、そして叫んだ。
「何すんだよ重(かさね)ぇっ！！　殺す気かぁっ！！」

２人が「え？」という顔をする。私はファイアボールが飛んできた方向を睨んだ。するとそこから１人の少年が現れる。
「ハッハッハッハッハッ、面白れぇ。許してくださいよ。」
私たちとあまり変わらない身長。感情をよく表に出し、よく笑うメガネ。本好き、書く小説に妙な躍動感がある魔術部炎系特化科へ進学する少年。
――重（かさね）。

ヴェルトとよくつるむ。通称凸凹（デコボコ）コンビ。
私はため息をついた。
「お前ちょっとそこ動くな。今から氷漬けにするから刹那が。」
「うんーってウチが！？」
「アハハハハー嫌ですー。」
重は何故か私と希夕に敬語を使う。
私は席に座り直し、弁当を口にする。
「まぁいつものことだしな……。どうでもいい…………。」
「レイヴンもう神ね。」
「あ゛？」
希夕がクスッと笑う。睨みつけても笑われた。
「ハハッ、チャージしたら絶対転ぶんですよー。いやー許して。」
「明日１日何にもしないなら許してやる……。」
もう限界だった。犯人が分かったことで緊張の糸がゆるみ、今までも倍の疲れが襲ってくる。
『今日は早く寝るんだよ。』
全員の声に反応する気力もなく、私はため息をつく。
４月１日、快晴。死ぬかと思う毎日が続いています――
……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8608r/

だぁくねす★でいず

2011年4月1日20時10分発行